




## 学位論文審査の要旨

論文提出者	栗原 康生
論文審査委員	(主査) 朝日大学歯学部教授 田村 康夫  (副査) 朝日大学歯学部教授 裕 哲崇  (副査) 朝日大学歯学部教授 北井 則行 
論文題目 <p style="text-align: center;">開咬小児の嚥下時における口蓋への舌圧接状態の検討</p>	
<p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>小児期における不正咬合の中でも舌癖に原因する開咬は小児歯科臨床において多くみられている。開咬を呈する場合、口腔前方を上下顎歯による閉鎖ができず、嚥下時には乳児型嚥下に類似した舌運動を行っている。一方、開咬には歯槽性の開咬と骨格的要因による開咬が存在するが、これまで行われてきた分析では歯槽性や骨格性といった分類による嚥下時の舌圧接の検討はほとんど行われていなかった。本論文では、開咬小児をその成因から、歯槽性（Ⅰ型）、下顎骨の時計回転（Ⅱ型）および骨格性（Ⅲ型）の3つのタイプに分類し、シート型感圧センサを用いて嚥下時の口蓋への舌圧接運動の特徴について検討したものである。</p> <p>本研究には、開咬群として25名（平均年齢8.9歳）、型別ではⅠ型が9名（平均年齢9.2歳）、Ⅱ型が7名（平均年齢9.2歳）、Ⅲ型が9名（平均年齢8.3歳）。またコントロール群として個性正常咬合を有する混合歯列期小児13名（平均年齢8.5歳）を対象としている。その他、研究方法の詳細は論文内容の要旨に記載されている通りである。</p> <p>その結果、舌接触順序は、正常咬合群が前方・中央・後方の接触順序が最も多くみられたのに対し、開咬群では一定の傾向はみられなかった。また舌接触持続時間は、唾液嚥下時の中央において、正常咬合群が815.0msに対し、開咬群全体が345.7ms、Ⅰ～Ⅲ型がそれぞれ334.3ms, 298.3ms, 390.0msと有意に短い結果を得ている。最大舌圧は、水嚥下時の後方において、正常咬合群が11.1kPaに対し、開咬群全体が7.4kPa、Ⅲ型が6.6kPaと有意に小さい舌圧を示していた。初期接触から最大舌圧までの時間は、水嚥下時の中央において、正常咬合群が283.5msに対し、開咬群全体が81.9ms、Ⅱ型が43.3ms、Ⅲ型が40.0msと有意に短い値を示したという。舌圧積分値は、唾液嚥下時の後方において正常咬合群が4.61 kPa・sに対し、Ⅰ型が1.02 kPa・s、および水嚥下時でも後方において正常咬合群が2.53 kPa・sに対し、開咬群全体が1.00 kPa・s、Ⅰ型が0.46 kPa・sを示し、いずれも開咬群の方が有意に小さい結果を得ている。</p> <p>これらのことから開咬群の嚥下時における舌の口蓋への圧接状態は、正常咬合群とは接触時間、舌圧ともに有意差がみられ、特に口蓋前方部よりも口蓋中央から後方部において正常咬合群より有意に低い値を示していたという結論を得ている。</p> <p>審査委員は、本論文が開咬小児の嚥下時における口蓋への舌圧接状態を明らかにしたことにより、今後の小児歯科臨床の発展においても寄与することを高く評価し、学位（歯学）に値するものと判定した。</p>	